

くまとかけ 熊蜥蜴

ボクの寢室の隅にある小さな書類棚の上に
三年くらい前に出張先で買い求めた二つの木
彫り動物が置いてある。一つは熊くまで、一つは蜥蜴とかけだ。

は「熊」である。熊の木彫りはよく見かける
ので買おうか買つまいか迷ったのだが、蜥蜴
の木彫りは日本では珍しかったので、「蜥蜴」を
買おうとしたら「熊」対の作品であると店員
に言われ、仕方なく一対で購入したものであ
る。

大きさはどちらも長さ二十センチ、高さは
熊が十五センチ、蜥蜴は十センチで、棚上の置
き飾りには適当である。

ある日、会社の帰りに仲間と一杯やけて帰宅
し、ネクタイを外したままでベッドに転げ込み
眠りに落ちた。そして騒がしいもの音に目覚め
て見回すと、床の上で蜥蜴と熊が睨み合い、走
りよっては噛み合い、噛み合ったまま身をよじ
り、互いに相手を捻じ伏せようとしている。

ボクはこの闘いを呆気に取られて見ていたが
彼ら二頭はボクが見詰めていることに気が付
くと闘いを止め、それぞれボクに向かって数回
吼えたと、棚上に戻るや木彫りの人形に戻って
しまった。

翌朝目覚めると同時に昨夜の奇妙な夢を思
いだし、棚の上をのぞきに行ったが木彫りの人
形はそのまま、別に変わったことは見られ
なかった。

その日も会社の帰りに仲間を誘われ、ほろ酔
い機嫌で部屋に帰ると、どちらの像も昨夜に
比べて一回りくらい大きくなっているように感
じられる。

酒のなせる錯覚だよと自分に言い聞かせな
がらベッドに横たわったが何故か気にならな
眠れない。枕元のカーテンを開けると月の明
かりが流れ込んできた。その光の中に寝転がっ
ているうちに気持ちが悪くなってきたのか、口
トロと眠くなってきたので、そろそろパジャマ
に着替えようかと思った矢先、またぞろ、蜥蜴

と熊が吼え立てあい床上に飛び降りるや闘いを始めた。

の獣たちはムクムクと蠢きながら大きくなり、床に飛び降りると闘いを始めた。

室内を所狭しと暴れ回るので、噛み合っている二頭めがけて枕を投げつけると、闘いを止めた熊がボクに襲いかかってきた。

昨夜までと異なり、二頭合わせれば一メートルを超す体長となっているため迫力のある闘いが展開された。吼え、唸り、噛み、床をき

蜥蜴がその後を追いかけるように、ボク目がけて飛びかかるようにする。

しらせ、壁を揺るがせ、部屋中を暴れ回る。気が付くと電話のベルが鳴り続けており、出

大きな枕で横殴りにすると、二頭ともぶつとび、やがて諦めたようにボクに向かって吼えたとながら棚上に戻って行った。

ると口うるさい隣家の親父からの「喧しい」という苦情の電話だった。

翌日、寝不足でスキズキする頭を抱えて出社し、その日は残業もせずに七時に帰宅して棚の上を見るべく、二頭とも昨夜と同じように向き合っていて並んでいる。

まかせに投げつけると、二頭とも闘いを止めた。そして、棚上に戻りながら熊がボクに向かい憎々しげに言い放った。

近寄って何度調べても間違はなく木彫りの人形であり、又、リモコン装置などが隠されている様子もない。勿論、彼らの身体の何処にも闘いの傷痕などはついていない。

どう見ても、単なる木の彫刻にすぎない。

そして、次の瞬間、二頭はただの木彫り人形に戻ってしまった。

しかしその晩も月が中天にかかるよう、木彫り

ボクは急に不気味な感じを覚え、翌朝、週末

なのが気にはなつたが会社に急用で休むといふ連絡を入れ、早速、近所の寺を訪ねた。出てきた顔見知りの任職に

「悪い夢を見なかつたのじゃ」

と一笑に付されてしまい少し離れた町の教会へ行ってみれば話を聞き終わつた牧師から会社の仕事やボクの人生観などを色々と尋ねられ、定期的に開かれているらしいカウンセラーの日時を記したパンフレットを渡され、是非いらつしゃい手を握られて返散することになつてしまつた。

結局その日、ボクは行き付けのサウナに閉じこもり、たっぷり汗を流し、久しぶりに長時間マッサージも受け、夕方になつて表へ出た。すると、毎晩続いた不気味な事件が、ただの疲労による夢のように思われてきて、怯えた自分になんとも馬鹿馬鹿しく思われてきた。

最近運動不足気味だったから、あんな夢になされたのか。夢だったから飼ひ犬の「ゴル」も吠えなかつたんだよ。そつだよ。あれは夢の世界

の話だつたんだ。学生時代から続けていた弓道も最近はやほりつ放して汗をしばるよつな運動もしていなかつたから、サウナで汗を流したのが気分転換を促したのだな。

と、一人で納得し、今夜は軽装になつて、軽く飲みに出かけるかと心に決め、家に戻り、玄関に着くと鍵が外れている。

「ハア、かけ忘れて出かけてしまつたのかと思ひながらドアを開けると、出張で三日ほど留守をしていた阿津沙が奥から走り出てきて「だいま」もお帰りなさいもなく、

「会社の帰りにしては早いと思つたら、今日は休んだのか」

と言ひ、

「べつしたの？ かずの。具合が悪いの？」

と問いかけてくる。ボクの名前は和之進わづのしんなので、阿津沙はボクをかずのと呼んでゐる。

「いや。一寸疲れが溜まつたからさ」と答えると、

「ごめんね。今夜は出張先で手に入れた和牛で、

特別料理を作ったげるからネ」

と言って、キッチンへ走り去って行った。

昨年未だ、正月を一緒に過ごすといって押しかけて来た阿津沙は、その後数回自宅に戻っただけでボクの家に住み込んでしまい、仕事先へもボクの家から通勤する始末になってしまった。そこで、心配した阿津沙の両親とも話し合い、結局、来年未までに式を挙げることになっている。

ボクは阿津沙に「三日連続の夢の話をしてどうかと思ったが、取り敢えず食事が済むまで黙っておくことにした。」この手の怪談話が好きなの彼女に今聞かせたら、料理の完成は深夜になってしまっ。

久しぶりにはと言っても僅か四日ぶりだが、阿津沙と食卓を囲み、ワインで乾杯をした。出張先での仕事がつまみくつたりして、阿津沙は極めて機嫌で、メインディッシュの和牛のシチューを食べ終えるころには、ワインの助けも借りて目元が潤み始めている。

ボクはつくづく、サウナの後、家に着替えに

帰って良かったと思っていた。阿津沙は週末に

は出張から早目に帰れそうだと行って出かけたので、ボクが残業や付き合いを避け、わざわざ休みを取って家にいたのだと決め込んでいる。本当は、ボクは例の悪夢のせいで、阿津沙が言い残したことなどすっかり忘れていたのだ。一寸した時間のずれでボクが軽装で出かけてしまい、深夜に帰宅したりしていたら、どうなっていたか想像がつかない。

その日は食事の片付けを済ますと、二人でシャワーを浴び、早々に寝室に閉じこもった。ベッドに上がるとき、目が自然に木彫りの方に移ったのだが、阿津沙に抱きつかれて成り行き通りになってしまい、阿津沙が寝付くのに、一緒に、ボクも深い眠りに落ちて行った。阿津沙の叫び声と激しいベッドの揺れに目を覚ますと、室内に射し込む月明かりの中で、阿津沙が、ベッドに這い上がろうとする蜥蜴の頸を思い切り蹴り上げたところだった。

蜥蜴は寢室の中央辺りまで飛ばされ仰向け

阿津沙は、

に倒れたが、すぐに身を捻って起き上がり、赤い口を大きく開けて、又、「ちび」に向かってくる。

「じゃあー、化け物なんだ」

と言っちゃ、ベッドから寢室の入り口の方へ大きくジャンプをして、壁際に置いてあった彼女の旅行かばんを取りに走った。

それに気を取られていると、ボクの首筋に熱

女の旅行かばんを取りに走った。

い息がかかり、ハッと身構えると、腐った魚の

旅行かばんを抱えてベッドに駆け戻る途中で、

ような口臭が頭上から吐きかけられて来た。

襲いかかる蜥蜴を、振り回したかばんで、又、

気付かないうちに、熊がボクの上に覆い被さっ

張り倒す。

て首筋を喰いちぎらさうとしていたのだ。ボクは

そしてベッドに飛び乗ると、かばんのサイド

全身の力で身体を下方にずらしながら枕を掴

ポケットから何かを掴み出し、近付いてきた蜥

むと、それを熊の頭部に押し当てて、揉み合っ

蜴に向かって、それを力一杯、投げつけた。投

た挙げ句、奴をベッドの下に突き落とした。

げられたそれは、蜥蜴の目の辺りに吸い込ま

足元では阿津沙が戻ってきた蜥蜴の頭を、ベ

れるように飛んで行くと、当たって粉々に砕け

ッドサイドのスタンドの柄で力一杯叩きのめし

散った。

ている。蜥蜴をぶん叩きながら、

その瞬間、ほんの一瞬だが、蜥蜴は全身の力

「なんなの、「ちび」

が抜けてしまったように動きを止め、不思議

と問いかけて来るので、

なことに熊の動きも静止した。それから二頭

「わっからわーよ。」のどろろ、毎晩、現れるん

の化け物どもは、それぞれ柵の上に飛び上が

だ」

り、元の木彫りに戻っていった。

とボクも熊を相手にしながら怒鳴り返すと、

阿津沙もボクも暫くの間、放心状態で、ベッドの上で互いの背中に寄りかかっていた。時が過ぎ、二、三日の経緯をボクが話し終わるころに白々と夜が明けてきた。

すると阿津沙はベッドを降りて書類棚の下に行き、二個の木彫りを取り上げて戻ってきた。

「夜が明けたら魔力をふるえないから大丈夫」と言いながら、ボクに蜥蜴の頭を指し示す。見ると、蜥蜴の左目の辺りが深々と削り取られている。

「ぶつけたあれは何だったの」

と聞くと、出張の行きがけに、仕事の成功祈願に行った神社で受けた、厄払いのお清めでお神酒を入れた素焼きのかわらけ「だ」と言う。そ

うて、

「まさか、本当に魔除けになるとは」

と呟いて溜息をついていたが、やがて小道具入れからナイフを取り出すと、木彫りの蜥蜴と髷を削り始めた。

小一時間かかって二個の木彫りが木屑にな

ると、それをゴミ回収用のポリ袋に詰め、本当は燃やしてから塩を撒いて清めたいのだがこの辺りは焚き火の禁止地区だからと言って、近所の生ゴミ置き場に運んで行った。

その後、ボクたちは昼過ぎまでぐっすり睡眠り込んだ。

夕方薄暗くなってから買い物に出かけた阿津沙が、心配そうな顔をして帰ってきた。

理由を尋ねると、買い物袋の中からゴミ回収用のポリ袋を引っ張り出して見せる。

買い物行く途中、生ゴミ回収は土曜が休みだったことを思い出し、今朝出した例のポリ袋を一旦家に持ち帰るつもりでゴミ置き場に立ち寄

ったところ、袋の口が開いている。あわてて袋

を取り上げて中を覗いたら、木屑が消え失せ

ている。ゴミ置き場の周囲を見回しても、木の削りかすがばら撒かれている様子はない。それで、急に気味が悪くなり、急いで買い物済ませて帰って来たのだと言う。

「最近、駅の周辺に住み着き始めたホームレスが夜間の暖を取るために持って行ったのだろう」

ボクが気軽に言つた、阿津沙は、

「そうなら良いけれど、もし木屑に残った魔力が夕日が落ちると同時に復活して逃げ出していくと、今夜、復讐にやっけて来たらどうしよう」と心配している。そのうち、

「ホリ袋にお清めの塩を一緒に入れておけば良かった」

と、とうとう自分が災難を呼び込んでしまったかのよう「悔み始め、唇を噛み締めている。なまじ怪談話に興味を持っているだけに、こうなったら徹底的に不安を取り除いてやらなさい、晩メシも、安らかな睡眠も我家を避けて行ってしまう」。

ボクは、もしあの化け物たちが潜んでいるとしたら何処だと思つのか、阿津沙に聞いてみた。すると、此処から一キロほど北の線路際の雑木林にある古い祠（ひら）しかないと言つた。

「この住宅地は、私鉄沿線の最後の丘陵地帯を開発して作られていて、その為か色々と土地にまつわる言い伝えがある。」

雑木林の古い祠は、鎌倉時代の領主の娘が隣国の豪族の長男との恋を、親同士（おやどち）の領地争いの結果、実らせることが出来ず、自害して果てた後、当時の人々が娘の魂を鎮めるために建てたと言ひ伝えられている小さな石の祠（いほ）。一時は地元の人々の心霊スポットになったこともあるらしい。

そんな娘の霊が悪さをするものかと言つて、鎌倉時代から現代までの時代の移り変わりの中では祠の供養など言わなくなりました。時代が必ずある。そういう時に、悪霊が住み着いてしまつたのだと、真面目に言つたのは、

何となく尤も（まとも）な言い分に思えたので、「じつせ夜になってしまったのだから、食事をしたら見に行つてやめ、長く闘いになるかもいれないのだから、しっかり晩メシを食わせてく

れ。今日は寝坊して、軽いランチしか取ってないから、これで悪霊を相手にすると、オレが奴らの工舟になっちゃうぞ」

と言つと、阿津沙は台所へ走りこんだ。

夜更けにお化け退治に出かけるのは面倒臭くて仕方ない気分だったが、阿津沙が作った一百グラムを越えていそうなステーキと新鮮野菜のサラダを炊き立てのメシで詰め込み、デザートの梨を食い終えるころには、面倒な気分は何処かに消えていた。

リビングの窓から空を眺めると、あと数日で下弦の月になりそうな月光が、流れる雲の縁を染めている。

丁度午前零時、動きやすいウエマに着替えたボクは、手ぶらで出掛けようと思ったのだが、

半ば脅しに近い阿津沙の懇願を聞くうちに、気味悪くなり、昔から魔除けになると言われている銀の鍔つばを付けた矢を準備した。この鍔は卒業したときに後輩たちが記念に贈ってくれ

たものだ。』のケースを肩にかけ自転車を出し、ついでに「ゴルの鎖を解く。

「ゴルは雑種だが、たびたび甲斐犬かいけんの純潔種に間違われたこともあり、ボクは、ゴルは怪犬かいけんだと言っている。だがゴルは怪犬の名に恥じず、何時の間にか空を飛べるようになってしまった。

ボクも阿津沙も空を飛ぶことができるので、驚きもなかったが、多分ゴルはボクたちが飛ぶ様子を見ているうちに、飛術を会得したのだろうと思う。阿津沙は、ゴルが南総里見八犬伝の血を引いているに違いないとほやいていたが、今どき、飼い主と犬が空を飛ぶなど知られたら、ママミの攻勢にかかり私生活などなくされてしまうので、ボクは阿津沙に緘口令かいはいをしき、ゴルも勝手に飛び回らないように鎖でつないでしまった。

そんな訳で正月以来、ゴルは鎖に繋がれることが多くなっていたので、鎖が外された途端、喜びの吠え声を上げて空高く舞い上がった。

ボクは、頭上高く飛ぶゴルに守られながら、

万一他人に出会したときを用心して、ペダルを踏みながらの飛行走行をしていた。これだと傍目には自転車を走らせているように見え

るのだが、実際は、自転車ごと地表すれすれに飛んでいるので、短時間にかかなりの距離を稼げるし、まず、道路の凹凸や障害物に邪魔されることがないので安全なのだ。

我家を出発したとき、舞い上がって飛翔していたゴルは、何時の間にかボクの自転車が進むすぐ前を、一見小走りに見えるようにして、やはり飛んでいる。

ボクたちが自転車の飛行走行を考え出したとき、阿津沙がゴルに、この走り方を特訓したのだ。どしゃぶって調教したのか判らないが、阿津沙が教えるとき、ゴルはすぐに覚えてしまった。気を付けないとボクも阿津沙に飽い慣らされてしまうぞなどと考えているうちに、ボクは線路に沿った道を、祠のある雑木林に向かって進んでいった。

をケースから取り出したとき、突然自転車を地上を走り始め、砂利道にタイヤを取られ、ボクは転げてしまった。

突然のことで、何故飛べなくなったのか判らないままに立ち上がり、落ち着いて辺りを見回すと、辺りは沼地のメタンガスがよごんだような瘴気に包まれている。頭上高くから聞こえるゴルのつなり声に気付き前方を窺つと、雑木林の中を螢火に包まれた異形のモノがこちらに向かって進んでくる。

地上を漂う瘴気の中は悪霊の結界になっているので、ボクの飛翔能力は奪われてしまったのだ。ゴルはこれを本能で察知し、上空に舞い上がったらしい。

悪霊は瘴気に触れれば螢光色に光ると、阿津沙が出がけに言った言葉が甦ってきた。ボクは、魔除けの銀の鏃の矢を番えるとき、何時でも放てる姿勢を取りながら、自転車を道端にも横たえ、慎重に前進して行った。

何時悪霊に遭遇しても良いようにボクが弓

そして悪霊が林から抜け出して、線路沿いの

道路に姿を現わしたとき、蛍光色を強く発している頭部目がけて矢を放った。

矢は風切り音を残して飛んで行き、悪霊の頭

部に突き刺さるうとした。その瞬間、矢はヤツ

の口に銜え取られて喰いちぎられ、鏃と矢羽

は別々に地上に落ちた。

引き絞り方が弱かったので銜えられたのだ

ろうと考え、ボクは次の矢を番えると進み始

めた。

その時、ゴルが突然奴の頭上、結界ぎりぎり

のところまで降りて来て激しく吠え付き、奴

がゴルを噛もつとして口を開き立ち上がった

ので、やっと異形の姿が見えた。

それは熊と蜥蜴が入り混じった怪物だった。

木屑の奇木細工だと、瞬間、ボクは思った。

喉の奥まで見える大きく裂けた口と、立ち

上がる体を支える鱗に包まれた太く長い尾。

爬虫類特有の冷酷な燐光を燃やす眼。この口

と、尾と、眼が熊本来のものを入れ替わってい

る。立ち上がると四五メートルはあるようだ。

これが奴の正体だった。ボクは、奴、クマトカ

ゲがゴルに気を取られて立ち上がったっている、そ

の胸元を狙って二の矢を放った。

銀の鏃は三個しかない。貴重な二本目だった。

だがその矢も一の矢と同じ運命を辿った。

呆然と立ち尽くすボクに、熊蜥蜴の嘲り声

が浴びせられた。

馬鹿め。俺たちを倒すのに、俺たちが誕生し

た後に作られたモノが役立つと思っているのか。

銀などは俺たちが生まれた遥か後世になっ

て、お前らが鉱石から造りだしたものだ。そ

んなモノで俺たちの命が絶てると本気で考え

ているのか。森羅万象を育むこの時空と同じ

歴史を有する我々を、悪霊などと呼び、思い

上がっているお前ら人間どもに、この自然の摂

理は判るまい」

言い終わると、熊蜥蜴はボクの方に向かって

立ち上がり、ゆっくり歩いて近付いてきた。

カッと開いた口の奥に洞窟のようにつながる喉

が見える。ボクはその洞窟の奥深くに狙いを

と悪太郎が仲間に向かって叫んでいる。

凝らして見つめた。だが月明かりはあるけれ

悪太郎の命令どおり龍蜥蜴の手足に巻きつ

ども、遠すぎてよく見えない。

いた鎖はビーンと張り、やがて悪霊のドデカイ

その時、バイクを急発進させた悪太郎がボ

図体は地面に引き倒された。手足は伸びきり、

クの方突っ走りはじめた。

今まさにむしり取られるように思われた。そ

向こうでは何時の間にか龍蜥蜴が立ち上が

して、毛深い四肢は突然、胴体から引き千切ら

り、倒れて苦しんでいるソクたちを一人つつ

れた。

呑み込んでいる。

悪太郎がぞまあ見やがれ。化け物野郎」と

悪太郎はボクの近くまで来ると、横っ倒しに

いつ声が聞こえ、ソクの一群はバイクのまま

バイクから投げ出された。そして言った。息が

龍蜥蜴に近寄った。

切れて、喉の奥から搾り出すような声だった。

その時、最初に倒れた龍蜥蜴に近づいた一人

化け物め。手足の千切れからムカデを出しや

が、異様な声を発してバイクから飛び降りる

がった」

と足を激しく蹴り上げ始めた。両足を振り上

ボクは、意味がわからず悪太郎に近づいた。

げ、地団太を踏み、最初は「この野郎」とか畜

そのボクに向かって悪太郎は、来るなど言っ

生め「なごど強がっている様子だったが、やが

ように手を振ったが、そのまま気を失って仰向

て「助けてくれ」と言いながら両腕を振り回し、

けに横たわった。ボクは駆け寄ったが傍奇

遂に頭を掻きむしり、地面に倒れ伏してしまっ

れなかった。

た。そして、その異様な状態は悪太郎を初めと

悪太郎の二つの鼻の穴から、大きなムカデが

する他のソクへも、あっという間に波及した。

這い出たのだ。そして二匹のムカデの一匹は耳

ボクは何事が起きたのだろっつかと思し目を

の中に潜りこみ、もう一匹は食いしばった歯の

間から口へ入り込んだ。ボクはそれでも、我慢して近寄ったのだが彼の頭髪の中に無数のムカデが蠢いていることには気がつき、咄嗟に倒れてペダルを踏みしめた。あつた自転車に駆け戻ると、踏み切りに向かってペダルを踏みしめた。

背後には、やってきた寵蜥蜴が悪太郎を呑み込んでいる気配がしていた。

悪太郎を呑み込むと、寵蜥蜴は再びボクを追いはじめた。

ボクは、自転車ごと飛翔しながら、「このまま我家の方へ戻ることに戸惑いを感じ始めていた。

ボクが住む住宅地には、土地が開発されたばかりのせいか、若い夫婦が多く、乳幼児が沢山いた。この異様な怪物を住宅地に侵入させる訳にはいかない。ボクが狙われているだけなら良いが、乳幼児まで寵蜥蜴が食い荒らしたりすることは、絶対に許せないと思っていた。

だが、住宅地への目印になる踏み切りは、目の前に迫っている。

ボクは、悩みながらペダルを踏みしめた。

その踏切の手前のところで、阿津沙の音が聞こえた。

「がづの。こっち命がうって。早くー」

寵蜥蜴の息を背中に感じるくらい、ヤツに追られていたボクは、無意識に阿津沙の声に導かれるように、踏み切りを住宅地の方へと曲がった。

その道の先の中央に、長い竿を構えた阿津沙がいて、

「真処に伏せてー」と叫ぶ。

奴に背後に迫られているボクが戸惑つと、阿津沙が、

「だいじょうぶだよ」と竿を構え直しはっやっくつ」と叫ぶ。

ボクは覚悟を決めて、自転車から飛び降り、がばつと地に伏せた。

ボクが転んだと勘違いした寵蜥蜴の勝ち誇ったような雄叫びが上がり、立ち上がる気配がした。

その時、阿津沙が竿を槍のように構えたまま、
夫奴に駆け寄ると空中高く舞い上がり、続いて急降下しながら龍蜥蜴の胸元目掛けて、その槍を突き出し、槍は深々と突き刺さった。
龍蜥蜴の雄叫びが悲痛な叫び声に変わり、長く尾を引いて消える。

と同時に、あの異様な形がドタリと道路に倒れ、血を吐き出すと、そのまま動かなくなっ
た。

白々と夜が明けてきた。
ボクは起き上がると、呆然と立ち尽くしている阿津沙を抱き締めた。そして、阿津沙の動悸が治まってから、物干し竿の槍の穂先を何で作ったのか尋ねた。答えは、

「タベのかわらけの破片よ。和之進さんが出かけた後、私も何か手伝えるかも知れないと思
い、着替えに寝室に行ったら、部屋の隅、ヘッドの足元辺りに大きめの尖ったかけらが一つ落ちていたの
で、それを物干し竿の先に瞬間接

着刃で貼り付けてきたのよ。魔除けの効き目
があつて良かった」
と、いつ内容だった。

そのまま言っ
て、阿津沙は急に泣きじゃくり始めた。

「わかったー。かつのがあの化け物にやられ
ちゃうかと思って、私、それなら死なば諸共だ
と
思
っ
て……夢中で竿を突き出したのよ。」
わ
か
つ
た
の
よー

阿津沙を抱き締めるボクの首筋を、熱い涙
が伝わり落ちていた。ボクは、この時ほど阿
津沙を愛しいと思ったことはない。

朝日を浴びると、倒れていた龍蜥蜴は緊張
して見守るボクたちの目の前で巨体を震わせ
ていたが、やがて、ボロボロと崩れ始め、小さ
な木屑となり、朝風に吹かれて飛び散ってし
まった。そして吹き飛んだ木屑のあとに、龍蜥
蜴が呑み込んだ悪太郎たち十二人が現れた。
皆、生きていた。多分、悪霊の帝に奉げられる

はずだったのだが、仲介役の熊蜥蜴が滅んだので生き返ったのだらう。悪太郎は仲間をまとめるとボクに

「あの化け物野郎の腹の中から良く見えたんだ。ありがとよ。いいアネサンだけ。大事にしな」

と言いつつ

「またな」

とボクの肩を叩いて、去っていった。多分寄せ集めの木屑の隙間からボクたちの様子がよく見えたのだらうと思いつ。

「さー。今日も普通過ぎなまで寝るか」

「ネエ、かつの。今夜は外食にしない私、疲れちゃった」

「うん。駅の側に出来たイタメシ屋に行くか」

【ばんぼん 一四〇号 平成十年十二月】